

企業が進め市民がデザインする森づくり

はじめに

ここで紹介する企業（コープさっぽろ）と進める森づくりは、2008年の北海道洞爺湖サミットを契機に「コープ^{あした}未来の森づくり基金」の活動がスタートし、各地域において北海道などと協定を結び組合員を中心に植樹活動を実施しています。そうした取り組みをしている中、2012年より、道民の森（当別町）のFゾーンにおいて、「この土地の潜在環境に応じた多様性豊かな森林を、市民の発想と行動によって再生する。また、森づくりの新しいリーダーを育成する。」ことを目標に掲げ、「森づくりワークショップ（以下WSと記載）」という新たな取り組みをスタートさせました。当社では、このWSに講師やスタッフとして協力していましたが、2014年からは、WSの企画・運営も含め、「コープ^{あした}未来の森づくり基金」との共催という形で活動しています。

1. 初年度のワークショップ

WSを進めるに当たり3つの目標を立てました。一つ目は「環境を読み取る（小さな違いから、自然のダイナミズムを発見する）」、二つ目には「空間を把握する（地図に落とせばデータになる、地名をつけて身近に）」、三つ目には「未来の森をデザインす

る（イメージを形に、まずはトレイル^{*1}とゾーニング^{*2}）」、というものでした。真っ白な地図を片手に、どんなところで、どんな風景なのか？といったところを把握するため、最初の2回はひたすら森づくり予定地内を歩き回ることから始めました。予定地はかつて牧野として利用されていた場所で、一見すると見渡す限り草原で（写真1）、その中でも傾斜や凹凸、湿った場所があり、講師たちのレクチャーのもと、地図と現地状況を徐々に融合させていく作業を行ないました（写真2）。3回目のWSでは、実際に数十年経過している森へ行き、その中で樹々がどのようにして育っているのかを観察した



写真1 道民の森Fゾーン全体の様子



写真2 WSの様子（Fゾーンの現地にて）



写真3 森での間伐作業の体験



写真4 WSの様子（デスクワーク）

り、間伐を行なうとどのような変化があるのかを体験しました（写真3）。その後、4回目となる現地でのWSでは、それまでの活動を踏まえ、森全体を見渡し、将来の森のイメージを膨らませ、そのあとに控えるデスクワークへの準備を行ないました。全部で6回のWSをこなし、ランドマークや地名や愛称、トレイルの検討などのゾーニングを行ない次年度以降植樹する樹種や植樹方法に参加者の想いを盛り込み（写真4）、1年目の活動は終了しました。森の名称は、Fゾーンにちなみ、「F」にはFamilyのF、FutureのF、FriendlyのFといった意味を持たせ、「Fの森」としました。

※1トレイル（trail）：森林・原野・山地などの踏み分け道（デジタル大辞泉より）

※2ゾーニング（zoning）：区分すること。用途別に区画すること（デジタル大辞泉より）

2. 2年目以降のワークショップ

2013年（WSとしては2年目）からは、初年度のWSでの成果を実現させていく形で進行し、計4回のWSとともに6月には植樹祭（写真5）を行ない、「Fの森」での森づくりがスタートしました。樹種は、周辺の自然林を手本にし、北海道内に自生する広葉樹を中心（一部針葉樹も）とした24種類で、1回の植樹祭で1,000本ずつ植えました。ここで、植樹活動と並行し森づくりWSを実施している形態を最大限に活かしていくため、植樹するだけでなく、植えた樹のその後の生育調査を林業試験場の研究員に助言・指導をもらいながら、WSの中で実践し続けています（写真6）。自らの手で調べることにより、実際に植えた木の生長量などが実感できるとともに、雪の重みで折れやすい樹、しなやかにそれを凌ぐ樹、動物たちに食べられやすい樹、食べら



写真5 植樹祭の様子



写真6 WSメンバーによる樹木調査



写真7 WSメンバーとの苗づくり

れにくい樹、生長の早い樹や遅い樹、など判っているようでいて明らかにされていない情報が多く整理されているところです。また、この活動の中で自然復元関連の技術を活かし、数年先の植樹に使用できるよう事前に「Fの森」周辺で採取していた樹木の種まきや苗づくりの一部分もWSの中で実践しています（写真7）。単に用意された樹を植えるのではなく、森林の復元を目指すことも目的になっているため、WSメンバーで種子の採取から苗づくりを行ない植樹までを行なっています。こうしたWS、植



写真8 Fの森の途中経過

樹祭という活動を2012年から2017年まで実施してきており、今では「Fの森」に市民でデザインされた若々しい森2.5ha（その中に約5,000本を植樹）が出来上がりつつあります（写真8）。本当の森になるのは数十年後となります。

3. 植樹から育樹へ

森づくりが進む中、かつては牧野として利用されていた土地だったため、植樹後の初期の段階で樹木が草本に隠れてしまう、という事が生じています（写真9）。施設（道民の森）の管理作業で機械等による草刈り作業を行なう時に、刈払い機等で誤伐されないよう目印を立てたり、樹木の周りの草抜きなどの対策を植樹開始の翌年より行っています。ただし、それだけでは人手が足りないため、もう少し輪を広げ多くの人に参加してもらうために、2015年より「育樹祭」を実施しています（写真10）。

おわりに

このように企業が共催し、専門家がアドバイスを



写真9 草刈り前の植樹地



写真10 育樹祭の様子

し、市民が参加して作業のみならずデザインや調査を行うといった森づくりは稀なケースです。当社は引き続きWSの企画・運営等に関わって行く予定ですが、こうした森づくりが多くの企業や場所で実践されるようなモデルづくりに繋げることができれば幸いと考えています。

